

昔むかし、あるところに、ひとりの若者がいました。若者は、怖いものが何もないので、怖いものなしのジョヴァンニンとよばれていました。

ジョヴァンニンは、世界じゅうを歩きまわって、とある宿屋にたどり着きました。泊めてくれと頼みましたが、宿屋の主人は、

「あいにく空いている部屋がないんですよ」とことわりました。そして、

「でも、あなたさえ恐くなければ、あるお屋敷を教えてあげましょう。そのお屋敷にはだれも住んでいませんが、部屋なら十分にありますよ」といいました。ジョヴァンニンは、

「どうして恐くなければなんていうんだい」とききました。主人は、

「あのお屋敷に泊まって、生きて出てきた人はひとりもないからですよ。あくる朝になると、教会の人たちがひつぎをかついでやって来て、その人の亡骸をひき取っていくんです」といいました。

怖いものなしのジョヴァンニンは、そのお屋敷に泊まることにしました。ランプと、お酒のビンと、ソーセージを一本ぶらさげて、お屋敷にのりこんでいきました。

真夜中、ジョヴァンニンが、テーブルについて食べたり飲んだりしようとしていると、だんろのえんとつの中から声がありました。

「落とそうか？」

ジョヴァンニンは、すかさず、

「落とせ！」と答えました。

えんとつから、人間の足が一本落ちてきました。ジョヴァンニンは、お酒をぐいと飲みました。すると、また声がありました。

「落とそうか？」

ジョヴァンニンは、答えました。

「落とせ！」

もう片方の足が落ちてきました。ジョヴァンニンは、ソーセージにかぶりつきました。

「落とそうか？」

「落とせ！」

腕が一本落ちてきました。ジョヴァンニンは、口笛をひゅうと吹きました。

「落とそうか？」

「落とせ！」

もう片方の腕が落ちてきました。

「落とそうか？」

「落とせ！」

胴体どうたいが落ちて来て、両足と両腕がくつつきました。そいつは、頭のない大きな男になって立ち上がりました。

「落とそうか？」

「ああ、落とせ！」

頭が落ちて来て、はずんで、胴体の上にくつつきました。ジョヴァンニンは、グラスをかざして、さげびました。

「乾杯かんぱい！」

男はいいました。

「ランプを持って、いっしょに来い」

ジョヴァンニンは、ランプを持ちましたが、動こうとしませんでした。男は、

「先に行け！」といいました。ジョヴァンニンは、

「おまえが先に行け」といい返しました。男は、

「おまえが先だ！」といいましたが、ジョヴァンニンは、

「おまえが先だ！」といいはりました。

男は、しかたなくさきに立って歩きだしました。ジョヴァンニンは、ランプをかざして、あとからついて行きました。ふたりは、部屋から部屋へ通りぬけていきました。すると、階段かいたんの下に小さなとびらがありました。男が、

「開けろ！」といいました。ジョヴァンニンは、いい返しました。

「おまえが開けろ」

男が、とびらをぐいと押し開けると、地下へ降りていくらせん階段が見えました。男が、
「降りろ！」といいました。ジョヴァンニンは、いいました。

「おまえが先に降りろ」

ふたりは地下室に降りて行きました。地下室の床ゆかに大きな石のふたがありました。男は、それを指さして、

「持ち上げろ！」といいました。ジョヴァンニンは、いいました。

「おまえが持ち上げろ」

男は、大きな石のふたを、小石みたいに軽々と持ち上げました。すると、その下に、金貨きんかのつまった大なべが三つ並んでいました。男が、

「このなべをぜんぶ上へ運べ！」といいました。ジョヴァンニンは、いいました。

「おまえが運べ」

男は、なべをひとつずつ、上にあげ、はじめの部屋まで運んでいきました。

だんろの前で、男はいいました。

「ジョヴァンニン、まほうは解けた！」

そのとたん、男の片足が離れて、けり上げたみたいに、だんろのえんとつの中へすいこまれていききました。男が、

「三つの大なべのうち、ひとつはおまえにやろう」といったとたん、今度は、片腕が離れて、えんとつの中へ飛びあがっていききました。

「もうひとつは、おまえが死んだと思つて亡骸をひき取りにやつて来る教会の人たちにやれ」
もう片方の腕が離れて、えんとつの中へ飛びあがっていききました。

「三つめは、最初に通りかかった貧乏人にやれ」

残っていた足が離れて、男は、腰をぬかしたかっこうになりました。

「この屋敷はおまえのものだ」

胴体が離れて、頭だけが床の上に残りました。

「なぜなら、屋敷の主の血筋はもう絶えてしまったからだ」
「さういうと、頭は浮かび上がって、だんろのえんとつの中へ昇っていききました。」

夜明けの空が白むころ、祈りの声が聞こえてきました。それは、ジョヴァンニンの亡骸をひき取りに、ひつぎをかついでやってきた教会の人たちの声でした。ところが、ジョヴァンニンは、窓辺にすわってのんきにパイプをくゆらせていました。

こうして、恐いものなしのジョヴァンニンは、大金持ちになって、そのお屋敷で幸せに暮らしました。ある日、ジョヴァンニンは、ふりむきざまに自分のかげを見て、ひどくおびえ、そのまま死んでしまいました。

村上郁再話

資料『イタリア民話集上』河島英昭編訳／岩波書店